

発行

北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北 32 条
西 5 丁目 2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第 74 号 2012. 4. 20
北海道ポーランド文化協会誌

北海道ポーランド
文化協会
創立25周年!

Happy 25th Anniversary!



第 60 回
例会

POLAND POLAND POLAND
ポーランド
映画
セレクションII

5月5日(土)~6日(日) 10:30~
北大学術交流会館(北8西5・正門入って左)



ワークショップ
「名匠たちの映画づくり」
チェホフスキ監督のドキュメン
タリー作品『モルトケ』上映(Cプ
ロ)やワークショップもあります。



コヴァルスキ家の歴史 (60分) モルトケ (38分)

映画製作の底力を感じる作品を 一挙公開!

--- 去年、好評だったポーランド映画セレクションの
“第2弾”となる上映会 ---

人生の不条理、悲しみ、不正、希望を少年少女や
老女の姿を通して描いた、美学派女性監督ドロタ・ケ
ンジェジャフスカの『僕がいない場所』、『木洩れ日の
家で』は自信をもってオススメです!

また、日本初公開のドキュメンタリー作品とともに
ふたりの監督をお迎えし、さらに、5カ国共同記録映
画製作プロジェクト「世界の夜明けから夕暮れまで」
の中から3作品を上映(3/5~16 岩波ホール上映終了)。

ワークショップではポーランドの巨匠の作品を例
にチェホフスキ監督が分析・解説。

どうぞ充実のラインナップをお楽しみください!

上映実行委員 氏間多伊子(うじま・たいこ)



第 61 回
例会

創立 25 周年記念コンサート



5月12日(土)

開演 PM 1:30 (開場 30 分前)
札幌コンサートホール Kitara 小ホール

～ショパンとロマン派の作曲家達～



フレデリック・
フランソワ・ショパン
(1810-1849)
Fryderyk Franciszek
Chopin

演奏部門は、これまで
会員の皆様、運営委員の
皆様のお力添えを頂き、
有意義な演奏会を開催し
てきました。今年は創立 25
周年を記念して、上記の
日程での開催です。

今回は～ショパンとロマ
ン派の作曲家達～の副題
のもと、演奏曲の幅を広げ

ました。札幌では滅多に聞けないタウジヒの作
品も演奏。わずか 30 歳で夭折したタウジヒは、
リストにも師事したピアニスト・作曲家です。演奏
曲は、今回演奏されるタウジヒのピアノ曲はモニ
ュシュコ作品をもとにした幻想曲。また、他に
演奏される声楽曲の作曲者キュイはモニュシュ
コに師事しました。このように、このプログラムに
は、タウジヒ、モニュシュコ、キュイという互いに
関連しあう作曲家の作品が循環するように組み
込まれています。

ピアノソロ、二台のピアノ、歌曲、ポーランド
語の詩の朗読等、変化に富んだ華やかさで、
充分にお楽しみいただけることと思います。

美しい新緑の午後ひととき、ご来場をお待ち
致しております。

演奏部会 薄井豊美(うすい・とよみ)

これから繰り広げられるイベントへの参加と広報活動へのご協力とご支持を宜しくお願い致します。なお、
上記の例会の<招待チケット>を同封いたしましたので、ご確認くださいませようお願い致します。(事務局)



第60回
例会

POLAND ポーランド
POLAND 映画
POLAND セレクションII

詳細は同封したフライヤーをご覧ください。

なお、当日は招待券1枚(Aプロ・Bプロ・Cプロのいずれかを選択)を
忘れずにお持ちください。

上映スケジュール

5日(土)

上映時間(終了時間)

10:00～ 開場

10:30 (12:10) **Bプロ** 『僕がいない場所』

12:30 (14:15) **Aプロ** 『木洩れ日の家で』

14:45 (15:00) 舞台挨拶

『コヴァルスキ家の歴史』A・ゴウエンビエフスキ監督

『モルトケ』W・チェホフスキ監督

15:00 (16:40) **Cプロ** 『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』

16:40 (18:10) ワークショップ **無料**



6日(日)

上映時間(終了時間)

10:00～ 開場

10:30 (12:15) **Aプロ** 『木洩れ日の家で』

12:30 (14:10) **Bプロ** 『僕がいない場所』

14:45 (15:00) 舞台挨拶

『コヴァルスキ家の歴史』A・ゴウエンビエフスキ監督

『モルトケ』W・チェホフスキ監督

15:00 (16:40) **Cプロ** 『コヴァルスキ家の歴史』『モルトケ』

16:50 (18:50) **Dプロ** 『世界の夜明けから夕暮れまで』

〈ベラルーシ・ミンスク篇〉〈ウクライナ・キエフ篇〉〈日本・東京篇〉



チケット

前売りは北大生協、市内主要プレイガイドでも取り扱い中。

<会員はチケット1枚(招待券)を同封しましたので確認し、当日ご持参ください>

【前売り券】 Aプロ・Bプロ・Cプロ / 一般 1000円、シニア 1000円

【当日券】 Aプロ・Bプロ・Cプロ / 一般 1200円、シニア 1000円、学生 500円

Dプロ / 一律(一般、シニア、学生) 500円

【特別上映作品】 500円(『世界の夜明けから夕暮れまで』)

Dプロ



ポーランド映画人による
学生ワークショップ&
ドキュメンタリー制作プロジェクト

『世界の夜明けから夕暮れまで』

The World From Dawn Till Dusk

若者たちがとらえた今、街の表情、人の暮らし。



—ベラルーシ・ミンスク篇— (39分)

若者たちがベラルーシの首都ミンスクを疾走する。ア
クロバティックに壁を登り、さまざまな場所を通り過ぎ
ていく。その傍らに見えてくる暮らし、家族、孤独…



—ウクライナ・キエフ篇— (44分)

ある晴れた夏の日の午後、ドニエプル川の遊覧船で休
日を楽しむキエフの人々。時に楽しく、時に深刻な会
話とともに、さまざまな人生が船上でクロスする。



—日本・東京篇— (40分)

日本の朝はラジオ体操とともに動き出す。3.11の避難
所、被爆をテーマにした演劇、鎮魂の歌声から日暮れ
の精霊流しへと、イメージの連鎖も試みられている。

監督+撮影コラボによる 最高の作品ができるまで

佐光 伸一

監督・脚本は、子どもを主人公にした傑作の数々で、ポーランドで最も注目されている女性監督ドロタ・ケンジェジャフスカ=写真左=。また、現在では製作が非常に難しい驚異のモノクローム映像を実現させたのは、ドロタの夫でもあり、本作ではプロデュースも手掛けるアルトゥル・ラインハルト=写真右=。

冒頭から私事で恐縮であるが、筆者はポーランドに2年ほど留学した経験がある。アンジェイ・ワイダやポランスキー、ケシロフスキなど、巨匠たちの作品は日本でよく知られているが、「同時代のポーランド映画は怎么样了のか」という関心から、現代ポーランド映画にもできるだけ足を運んだ。2年の滞在の中で、とりわけ心に深く刻まれた2つの作品があった。ひとつは、多感な少女と、流浪のロマ(通称、ジプシー)の一団の出会いと別れを哀感込めて描いた『悪魔、悪魔』(日本公開時「ディアブリー・悪魔」)。もうひとつは、シングルマザーに育てられている少女が、赤ん坊を誘拐し1日をともに過ごすことで、自分の心の中にある愛の感情に目覚める寡作『鴉』(日本未公開)である。この2本がともに、同じ監督ドロタ・ケンジェジャフスカの作品であることを知るのは後のことである。この度、彼女の代表作『僕がいない場所』、



『木洩れ日の家で』を札幌で同時上映できる機会を得たことは、筆者にとって望外の喜びである。

ドロタ・ケンジェジャフスカは、1957年生まれの54歳、共産主義時代に教育を受けたが、卒業後は、すでに社会主義体制が崩壊しており、自由に表現活動を行えた最初の世代である。

母、ヤドヴィガ・ケンジェジャフスカも映画監督で、幼いころから母親の撮影現場について行き、興味を持ったという。その後、ワイダやポランスキーも学んだウッチ国立映画大学で本格的に映画製作を学ぶことになる。先述の『悪魔、悪魔』(1991)でグディニャ・ポーランド映画祭で最優秀監督賞・審査委員特別賞、『鴉』(1994)でプラス・カメルイメージ国際撮影芸術フェスティヴァル「金の蛙」賞、最新作『明日は、よくなる』(2010)でドイツ児童映画賞グランプリと、国際的に最も評価されているポーランド映画人のひとりである。

撮影を担当するのは、『鴉』の撮影を手掛け、それを機に彼女と結婚したアルトゥル・ラインハルトであり、彼女のその後のすべて作品で撮影を担当するだけでなく、『デューン/砂の惑星II』、『トリストランとイゾルデ』などハリウッドにも招かれるなど、彼の生み出す美しい映像に魅了され、彼に撮影を依頼する映画人は少なくない。ケンジェジャフスカとラインハルトは、現在のヨーロッパ映画界で最も魅力的なペアであると言える。 上映実行委員長 (さみつ・しんいち)

監督は2009年「大阪ヨーロッパ映画祭」のインタビューで次のように応えている。「ポーランド語のタイトルをそのまま英訳すると“Time to Die”死ぬべき時、終わりの時になるが、このポーランド語には、二つの意味があって、困った時に一体どうしましょう、という意味もある。公の場で死について語ることはタ

タイトルについて

ブー視され心の中にしまっておくべきという考えもあったが、映画を観ていただき、かえって死というのはそんなに怖くないもので身近に感じてほしかった。また、アルトゥルさんも「自分の人生をきちんと整理して、穏やかに死を迎えるというのが、美しく死を迎えることだと思います」と語っていた。

Aプロ

木洩れ日の家で

原題 Pora umierać
2007年/104分



僕がいない場所

原題 I am/Jestem
2005年/98分



監督・脚本・編集 : ドロタ・ケンジェジャフスカ
 製作・撮影・編集 : アルトゥル・ラインハルト

ヴウォデク・パヴリク	音楽	マイケル・ナイマン
ダヌタ・シャラルスカ クシシュトフ・グロビシュ パトリツィヤ・シェフチク カミル・ビタウ	出演	ピョトル・ヤギェルスキ アグニェシカ・ナゴジツカ エディタ・ユゴフスカ パヴェウ・ヴィルチャック

木洩れ日の家で

この作品は、ケンジェジャフスカが、自ら敬愛するポーランドの名女優ダヌタ・シャフラルスカのために、自ら脚本を書き、監督したものである。物語は、91歳の女性アニェラの人生最期の数日間である。彼女は、郊外の森の中の古い屋敷にひとりで暮らし、街に住む一人息子もあまり訪ねて来ることはない。話し相手は愛犬フィラデルフィアのみと言う、孤独な女性である。

瑞々しい感性を持つアニェラは、戦前に両親が建てた家を愛し、この家を守ることに人生最後の情熱を傾ける。この屋敷を買い取ろうとする外の世界との確執、音楽クラブを主宰する若い夫婦とそこに通う子供たちとの出会い、それらはすべて彼女が最後に下す決心へとつながる。

登場人物と言えるのは、老女と犬と古い屋敷である。まるでシャフラルスカひとりが舞台に立つ演劇を見ているようである。物語はすべて彼女の視線を



A プロ

通して描かれる。彼女の屋敷の売買を一人息子が独断で商談する場面、立ち退きを求められる若い夫婦の悩みはすべて、双眼鏡を通して覗く彼女の視点で描かれる。そこで何が起きているかはっきりとは分からず、観客にとっては非常にもどかしい。

しかしわれわれが、自分の周囲の世界を知るとは、まさにそのようなことではないだろうか。科学技術がいかにか発達しようとも、ひとは自分の五感を通してしか、世界を認識することはできない。公平になろうと、ひとがいかにか努めたとしても、結局は、自分が見聞きしたことを、自分の経験のみを基準に判断するしかない。

カメラを自由に移動させ、対象を真正面から撮るのではなく、アニェラの眼という限定された視点を通して語ることによって、彼女のこころの動きが、より切実に私たちに響く。自分が知り得た限られた情報のみを基に判断する時、ひとは独断や妄想から逃れられない。被害意識から、周囲の世界に対し敵対的な態度を取ってしまうことさえある。自分が眼にした限られた風景の中で、ひとはいかに善良であり続けられるかを、アニェラの人生の最後の数日間を通して監督は問うているように思える。

(さみつ・しんいち)

え、精神的に活動を続けている。



監督が最も尊敬しているポーランドの九十一歳の大女優

「ポーランド映画界の生ける伝説・世紀の女優」と称されて

去年の夏、ドロタ・ケンジェジャフスカ監督の作品をDVDで数本鑑賞する機会に恵まれた。すっかりその魅力にひきこまれた。

同じ頃、東京・岩波ホールで彼女の作品『木洩れ日の家で』が評判をよび、連日行列ができていくというニュースが入ってきた。少しでも早く観たい気持ちが高まり、サークル仲間と道内で先行する苫小牧の「シネマ・トラス」に足を運んだ(71号14頁掲載)。驚異のモノクローム映像は想像力をかきたて、主人公が現実世界とは違う確立された世界の

人であることを白黒で表現する。その美しさと死生観をあぶりだす静謐さがすばらしい。

日本には、人の幽玄の世界を表現し、受継がれてきた伝統芸能の能がある。その最高峰は高齢の女性を主人公にした老女物で、その姿を最高の芸術としてとらえている。能の中では、老いは美しく、完璧な存在だ。無駄がなく、まさに「人間の華」としての能の価値観に寄り添う不思議さが、この作品にはある。

(うじま・たいこ)



Bプロ

僕がいない場所

両親から捨てられ、孤児院で暮らす少年クンデラ。その孤児院から逃亡し、母親に会いに行くが、彼女のところに留まることもできず、川岸に佇む廃船に住みつく。ある日、彼の前にひとりの少女が現れる。彼女も、美しく賢い姉への劣等感に悩み、自虐的にアルコールに慰めを見出す孤独な存在である。似た者同士であるふたりの、こころの触れ合いを悲しく綴る。

ここでも、物語は、少年の視線を通して語られる。運動場で遊ぶ子供の輪、地元の少年グループ、川岸に暮らす裕福な家庭、パーティに興じる母の姿、川辺で石投げをする美しい少女、彼はいつも少し離れた場所から眺める。自分が入って行くことを許されていない場所、手に入らないものに思慕を込めて見つめる。この作品の原題は“Jestem”(英語に直すと、“I am”)、「僕はここにいる」という意味である。「ここにいるよ」とは、誰にも振り向いてもらえない時に、ひとが発する最も切実なことばである。『僕がいない場所』という邦題は、一見すると原題とは逆さまのように思えるが、自分が行けない場所を見つめるクンデルの姿を的確に表現した見事な訳である。



『悪魔、悪魔』、『鴉』を始め、彼女の作品のほとんどは子供を主人公にしたものである。それに対し『木洩れ日の家で』は老人が主人公となっている。社会の中心にはまだ入っていない子供と、その中心

から出て来た老人は、ある一定の距離を持って社会を眺めているという点では同じで共通している。『悪魔、悪魔』で登場するジプシーの集団と引き、いつも社会から疎外された存在に、ケンジェジャフスカは優しいまなざしを注ぐ。彼女の作品の大きな魅力が、夫ラインハルトのカメラによる映像美であることに筆者も異論はない。しかし、彼女の作品世界は芸術至上的ではなく、映像で見せる瑞々しい感性の内側に、鋭い社会意識を持ちあわせていると言える。老人の孤独死、親の育児放棄など、日本とポーランドという異国が、いかに共通の問題を抱えているかは、ただ驚くばかりである。アプローチによっては陰惨な作品になってしまうような難しいテーマを、繊細で善良な主人公たちのまなざしを通して表現することで、観る者は、肯定的な世界観を失わないでいられる。彼女の作品は悲しい結末のものが多いが、見終わった後なぜか、日々の生活の中でこころに堆積した汚れが浄化されているような気がする。

モノクロ映像、限られた視点、極端に少ないセリフなど、彼女の演出、夫ラインハルトのカメラは、表現したいことを付け加えて行くのではなく、余分なものを削り取っていくことで、レリーフのように対象を浮かび上がらせる。筆者が彼女の作品にこれほど魅了されるのは、日本人の感性に素直に響く、彼女の寡黙さゆえかも知れない。(さみつ・しんいち)

作品誕生のきっかけとは…

監督はある新聞記事に興味をひかれた。ひとつは少年が養護施設を抜け出し、彼を拒む実母のところへ帰る話。もうひとつは貧困に苦しむ大家族の少年が詩人になることをいつも夢見ていたという話だ。そして後者の少年に実際に会い、監督は映画化を決意する。また、日本でも『ピアノ・レッスン』以来、熱烈なファンを持つマイケル・ナイマンが音楽を担当したのは、ある映画祭での偶然の出会いからだったという。

クンデル(少年) / ピョトル・ヤギェルスキ
Kundel / Piotr Jagielski

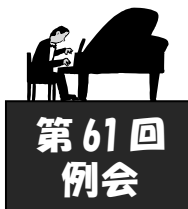
クンデル少年を演じたピョトル・ヤギェルスキは、撮影直前にシフィエントフウォヴィツェ近くの小さな町で見つけられて、主役に抜擢されたラッキーボーイである。7人の女兄弟がいる家族の中で育ち、映画初出演ながら、見事に主役をえんじた。



クレツズカ(少女) / アグニェシカ・ナゴジツカ
Kuleczka / Agnieszka Nagórzycka

少女クレツズカを演じたアグニェシカ・ナゴジツカは監督が国中で子役たちを探している中で、養護施設で見つけられて今回の重要な役に抜擢された。初めての映画出演ながら、その存在感を見せつけ、この作品をきっかけに演技することに目覚めた。





第61回
例会



創立25周年
記念コンサート
2012.5/12 (土)
開場 PM 1:00
開演 PM 1:30
札幌コンサートホール
Kitara 小ホール

昨年は第7回ルーマニア国際音楽コンクールに入賞され、最近では札幌市役所の市民ロビーコンサートに出演するなど、活躍が驚くほど多岐にわたる運営委員の高橋健一郎さん。今回のコンサートへの思いを語っていただきました。

MUSIC ESSAY



創立25周年記念コンサートに向けて

高橋健一郎

初めて私が出演させていただいた北海道ポーランド文化協会の演奏会は、2006年11月の第50回例会「秋の午後のショパンコンサート」でした。ピアノから離れていた長いブランクの期間を経て、またもう一度ピアノと真剣に向き合いたいと思い始めたちょうどその頃に、運営委員の三浦洋先生にコンサート出演のお声をかけていただいたのでした。それ以来、協会の演奏会で演奏するのは今回で5度目になります。

このたび、創立25周年を記念したコンサートにあたって、演奏曲としてふと頭に浮かんだのはショパンのバラード第1番でした。まだ小学生だった頃、姉からのおさがりでもらった小さなラジカセで音楽を聴くようになり、その中でサンソン・フランソワの弾くこの曲に出会ったときの衝撃は忘れられません。わびしげな語り、ほとぼしる激情、甘美な抒情——実に様々な世界を通過し、しかも華麗な技巧的パッセージに彩られているこの曲に、幼い私はすっかり魅了されてしまったのでした。

その後、数年経ってレッスンで自分で実際にこの曲を演奏することになったときの感激もまた忘れ難いものがあります。そして、そのレッスンは今からちょうど25年前、高校1年生の4月ごろのことでした。その後ピアノからしばらく離れた私は、この曲をステージで弾くこともなく、思い起こすこともほとんどなくなっていました。今回協会の25周年記念でふと思いつき、演奏させていただくことになったのも、何

かの縁かもしれません。「縁」と言えば、そのレッスンをしてくださったピアノの恩師であり、昨年5月にお亡くなりになった林靖子先生も生前北海道ポーランド文化協会の会員でいらっしやり、三浦先生はそこからの連想で私を協会に誘ってくださったそうです。協会の記念すべきコンサートに、このような思い出深い曲で出演させていただけることを心から嬉しく思います。

また、今回はソロの他にソプラノの松井亜樹さんの伴奏でも出演いたしますが、松井さんもまた林先生の生徒でした。生徒たちによる協演をきくと先生も喜んでくださることでしょう。

演奏家というのは、本来まず作曲家が思い描いた音楽をいかによりよく再現するかということに一番に心を砕くものでしょう。しかし、そこに演奏者個人個人のいろいろな経験、思いというものが自然ににじみ出てくるものだとも思います。作曲家と演奏家のそれぞれの個性が一緒になり、そして一つの空間の中で、聴いて下さる方々と共有される、それが演奏会の醍醐味なのかもしれません。

今回出演される他の方々もきっといろいろな思いを抱きながら曲に取り組んでいらっしやることと思います。私も自分の演奏のとき以外は聴衆の一人ですから、それぞれの演奏者の思いのにじみ出た演奏に触れ、共有することのできるその幸せな瞬間を今から心待ちにしています。

運営委員 (たかはしけんいちろう)

主催：北海道ポーランド文化協会

後援：駐日ポーランド共和国大使館・札幌市・札幌市教育委員会・北海道新聞社・日本ショパン協会
北海道支部・札幌大学・㈱ヤマハミュージック北海道札幌店・㈱河合楽器製作所北海道営業所

交通：札幌市中央区中島公園 1-15 地下鉄「中島公園駅」より徒歩7分・市電「中島公園通」徒歩4分

お問い合わせ先：011-556-8834(安藤)

—ポーランドだより—

変わりゆくポーランドの復活祭

津田晃岐

ポーランドの西部の町、ポズナン市に住み3年になる。市内のアダム・ミツケヴィチ大学と外国語大学で教鞭をとっている。かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998年から2000年にかけてクラクフ市に留学。ポーランド人が日本をどのように見ているか、そして現在のポーランドがどう変わったかを興味深く眺めている。



「キリスト復活」
スイスター・フォン・メスキルヒ画

1. 「大断食」と「聖週間」

復活祭はキリスト教徒にとって、一年で最も重要な祝日である。「復活祭は春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」と決められており、年によって変わる移動祝日である。ポーランドでは翌月曜日も休日である。

復活祭の準備は、その一か月以上前から既に始まる。四旬節である。四旬節は、灰の水曜日から聖木曜日まで40日(日曜日を除く)続く。ポーランド語で「wielki post 大断食」と呼ばれる通り、もともとは飲食を制限する期間だが、それは何より、来たる復活祭を心身ともに清めて迎えるためであり、そこから、日頃の自分を顧みて食事の節制、遊興の自粛、罪の償いを行なう期間でもある。ローマ・カトリック教会では、特にこの期間の祈り、断食、慈善が奨励されている。信者の中には、この時期に特別の「postanowienia wielkopostne 四旬節の決意」を自らに課す者もいる。

例えば、私のコーヒー好きの友人は毎年wielki postの期間中コーヒーを断つ。また、wielki postの期間中は毎日ミサに参加することを決めた友人もいれば、この時期に慈善行為として纏まった金額を教会や貧しい人々に寄付した者もいる。

さらに、ローマ・カトリック教会が定める「カノン法」によれば、カトリック信者は「少なくとも一年に一度は、自らの大罪をすべて正直に告白する義務」(989条)があり、同時に「少なくとも一年に一度は、ミサ聖祭を受ける義務」があり、後者の義務は「復活祭の時期に果たされるべきである」(920条)とされている。もちろん、大罪を告白(いわゆる「告解」。俗に「懺悔」とも言う)しないままでミサ聖祭(ここでは「聖体」のこと)を受ければ、これまた大罪と見なされているので、復活祭が近づくにつれ、告解に向かう人の数も増えてくる。そしてこの時期、突如として生れ変わったかのような、あ

るいは気持ち悪いくらいに善人となった人々が周囲に溢れる。昨日も普通に会っていた友人から突然謝罪され、赦しを求められることもある。これは何も敬虔な信者の間だけに限らない。ふだん教会に通っていない人達も、かなり多くの者がこの時期、告解をし、心を綺麗にしようとしているようだ。もちろん一時的な回心だが、今も毎年繰り返されている光景である。ちなみに、四旬節の期間中は教会のミサでも、その他の祈りでも「Alleluja アレルヤ」(ヘブライ語起源で「主をほめたたえよ」という意味)は唱えられない。

復活祭前の一週間は「Wielki Tydzień 聖週間」と呼ばれ、各家庭で復活祭のための具体的な準備が始まる。すなわち、大掃除と料理である。あちこちで絨毯を叩く音が聞こえる。窓を洗い、家中の埃を払う。この機会に、家の壊れている箇所を修理する。それから買い出しもする。そして、料理が始まると、家の中に居場所のない男衆は、手持無沙汰に往来に集まり、ビールを片手に立ち話をしている。

聖木曜日の夜のミサからは「triduum paschalne 過越の聖なる三日間」が始まる。聖木曜日の夜のミサは「主の晩餐のミサ」と呼ばれ、イエスがミサの形式を定めた最後の晩餐を記念したミサである。弟子の足を洗ったイエスに倣い、洗足式も行われる。聖金曜日は、一年で唯一ミサが行われない日である。ミサの代わりに「主の受難の祭儀」が行われ、イエスの受難と死を偲び、十字架の礼拝が行われる。聖金曜日は「大齋」と「小齋」の断食が奨励されている。

聖土曜日の日中には、小籠に食べ物を詰めて教会へ行く。「święconka」と呼ばれ、聖土曜日に教会で聖水を振り掛けられて聖別された食べ物である。伝統的には、子羊の人形(バター製、砂糖製、チョコレート製、プラスチック製などがあり、十字架や「Alleluja アレルヤ」の文字が描かれた赤い小旗が添えられることが多い)、パン、塩、イースター・エッグ(着色・装飾されたゆで卵で、一色に染められた卵をkraszanka、柄の描かれた卵を

pisanka と言う)、西洋ワサビ(chrzan)、肉(豚肉のハムかソーセージであることが多い)などが小籠に入れられている。小籠の食べ物にはそれぞれ意味がある。しかもキリスト教の伝統の背後に、ユダヤ教の伝統やキリスト教以前のスラヴ文化の影がちらつく二重、三重の象徴体系になっている。——子羊の人形は、自らを生贄の子羊として神に捧げ、その死によって全人類の罪を贖い、その復活によって死・罪・悪に打ち勝ったイエスを象徴している。赤い小旗は受難の、しかし勝利の戦旗である。ユダヤ教の「過越祭」(「除酵祭」とも言う)の日には、子羊を屠って食べる伝統があった。パンは、イエスの体を象徴すると同時に命の糧をも象徴する(「わたしが命のパンである。」ヨハネによる福音書 6 章 35 節)。そしてユダヤ教の伝統においては、イスラエル民族がエジプトを出た後、40 年間砂漠をさまよっていた時に空から降ってきたパンを思い出させる。塩は、キリスト教徒の使命(「あなたがたは地の塩である。」マタイによる福音書 5 章 13 節)を象徴するとともに、腐敗からの守り、悪霊からの清めを象徴である。ユダヤ教の伝統においても、塩は神との契約を象徴し、神に献げ物をささげる時は塩をかける。イースター・エッグは、新しく生れる命を象徴し、イエスの復活と洗礼による新しい命を象徴すると同時に、家族で卵を分かち合うことで一家の子宝・繁栄を象徴する。西洋ワサビは、イエスの受難の苦しみの克服の象徴であると同時に、生命力や精力の象徴でもある。肉は、家族が飢えることのない、不自由な暮らしの象徴である。



籠の中には、子羊の人形(菓子)・パン・塩・イースター・エッグ・西洋ワサビ・肉(ソーセージ)が詰められている

私達が小籠を持って教会に行った時には、同じように籠を持って集まった人達で教会は一杯だった。しかも驚いたことに、こうした食べ物の聖別は、聖土曜日の中 20 分置きに行なわれていたのだ。私達がいた時にだけ、偶然一杯だったとは思えない。加えて、同様の聖別は各教区の教会でやっているのだから、教会離れが叫ばれてはいても、まだまだポーランドはカトリックの国なのだと思います。

聖土曜日、日没後に行なわれることになっている復活徹夜祭のミサまでは、断食が奨励されているので、日が暮れると、身を綺麗にし、晴れ着を着て、お腹を空かせて、教会に向かう。そして、夜を徹した復活祭のミサに参加するのである。

復活徹夜祭のミサまでは、断食が奨励されているので、日が暮れると、身を綺麗にし、晴れ着を着て、お腹を空かせて、教会に向かう。そして、夜を徹した復活祭のミサに参加するのである。

2. 「パスハ」

辺りが暗くなり、すっかり夜になった頃、復活徹夜祭が始まる。復活徹夜祭は内容的に非常に豊かで、時間的にも非常に長い。5 時間以上続くこともある。

復活徹夜祭は、4 部構成になっている。第 1 部は「光の祭儀」、第 2 部は「ことばの典礼」、第 3 部は「洗礼の儀」、第 4 部は「感謝の典礼」である(ふだんの日曜日のミサは「ことばの典礼」と「感謝の典礼」から成る)。

「光の祭儀」では、電灯が消され、教会全体が文字通り闇に包まれる。やがて火が起こされ、火と蠟燭(「paschal パスカル・キャンドル」と呼ばれる大きな蠟燭)が聖別され、復活したイエスの象徴である蠟燭がその灯とともに真っ暗な教会に入ってくる。そしてその蠟燭から、信者が各自持っている小さな蠟燭に灯が分けられ、灯は蠟燭から蠟燭へと広がっていき、ついには教会全体を照らし出す。これは罪の暗闇、あるいは罪の結果としての死の暗闇にイエスが入ってきて、救いの光を与え、その光が世界に広がっていくことを表している。美しい光景である。

「ことばの典礼」では、聖書から 9 つの箇所(ふだんの日曜日のミサでは 3 つの箇所)が朗読され、朗読と朗読の間には詩編が歌われる。最後に読まれる福音書以外の 8 つは、毎年同じ一節が読まれる。旧約聖書から 7 つが取られており、神が天地創造の瞬間から人類の救いを望んでいたという救いの歴史が語られる。その後で新約聖書から、洗礼について語る使徒の手紙、イエスの復活の場面を伝える福音書がそれぞれ朗読される。

「洗礼の儀」とは、いわゆる洗礼式で、水の祝福、諸聖人への連願、信仰宣言が唱えられた後、受洗者は聖水を掛けられ(あるいは聖水のプールに浸けられ)、新たな信者となり、教会の共同体の一員に加えられる。洗礼式を見守る他の信者達は、自らの洗礼を思い出しながら「odnowienie przyrzeczeń chrzcielnych 洗礼の約束の更新」を唱える。洗礼によって人間は、これまでの古い性質をその罪とともに洗い流され、今や神の意志にしたがって生きる新たな命を受けるのである。

“わたしたちは洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。”

(ローマの信徒への手紙 6 章 4 節)

「復活祭」はふだんポーランド語で「Wielkanoc」と呼ばれる。「(イエスが復活した) 大いなる夜」という意味である。しかし「復活祭」を表すもう一つの言葉がある。主として神父や敬虔な信者によって用いられる

呼称だが、「Pascha パスハ」と言う。「パスハ」は、イスラエル民族がエジプトを脱出した「過越(ヘブライ語で“pesach”)」の夜とそれを記念したユダヤ教の「過越祭」から採られている。というのも、イエスが聖木曜日の最後の晩餐でミサの形式を定めたとき、ユダヤ教ではちょうど過越祭が祝われており、イエスは弟子達と伝統的な過越祭の食事をしながら、同時に新しい形の「過越」の祭、すなわちミサ聖祭(キリスト教のミサ)を定めたからである。

“イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。」”(ルカによる福音書 22 章 15 節)

こうしてイエスは、新しいミサ聖祭(キリスト教のミサ)を意図的にユダヤ教の「過越祭」になぞらえる同時に、自らの受難と死と復活をもイスラエル民族の「過越」に重ね合わせる。つまり、ファラオのエジプト軍に追われた絶体絶命のイスラエル民族が、葦の海(紅海)を渡って逃れ、新たな命を得たことを思い出させる。現に復活徹夜祭の朗読の一つは、出エジプト記のこの場面である。水は、ここでは新旧を分かち死の象徴である。そしてこのことは、復活祭に洗礼式が礼式が行われることもあるが、ローマ・カトリック教会では、行われることと無関係ではない(ふだんの日曜日に洗礼式が行われる時期として復活祭がもっとも相応しいとしている)。洗礼の水を経て、人間の古い性質が死に、新しい人間として再生するのである。こうしてユダヤ教の「過越」、キリスト教のミサ、復活祭、そして洗礼式は、死からの再生、あるいは新たな命によって、互いに重なり合っている。

「感謝の典礼」は、ふだんのミサの場合と同じで、聖変化と聖体拝領が行なわれる。今夜初めて洗礼を受けた信者が成人の場合は、ここで初めての聖体を拝領する。

そして、四旬節から今まで唱えられることになかった「アレルヤ」の朗唱によって復活徹夜祭は終わりを迎える。

復活徹夜祭のミサを終え、既に明け方、タクシーで帰ろうとした私達にタクシーの運転手は冗談半分に訊いた。「こんな時間に、どこからの帰りですか?」「教会からの帰りです」タクシーの運転手はピンと来ない様子だった。それで、急に真面目になって尋ねた。「教会で、何があったんですか?」「復活祭のミサが今終わったんです」驚いたタクシー運転手はそれ以上何も訊かなかった。



エジプト軍が追う中
モーゼとともに出エジプト

3. 「復活祭の朝食」

復活徹夜祭のミサの後には、早朝にも関わらず、復活祭の特別な朝食が取られる。「復活祭の朝食 *sniadanie wielkanocne*」と呼ばれる特別な朝食で、この瞬間のために数日前から準備されていたものである。教会の共同体の信者達と一緒に(レストランなど借り切って)食べる場合もあるが、家に戻って家族と食べるのが伝統である。

「復活祭の朝食」の伝統的なメニューと言え、ゆで卵、ハム、ソーセージの他に、「*zurek wielkanocny* 復活祭ジュレク」(ふだんのジュレクと違うのは、西洋ワサビを入れることと生クリームを加えて白く仕上げること。中部および東部ポーランドではジュレクの代わりに「*barszcz biały* 白バルシチ」を食べることもある。「白バルシチ」も、ふだんビーツから作る赤いバルシチとは違い、肉の煮汁から作られ、酸味を加えられる)、「*bigos* ビゴス」、「*salceson* サルツェソン」(豚の頭肉などを細かく切り、香辛料とともに煮てゼリーで固めたもの)、「*kaszanka* カシヤンカ」(豚の血と蕎麦の実を詰めた腸詰)などがある。デザートでは、「*mazurek* マズレク」(キャラメルソースやチョコレートやジャムや砂糖を表面に塗って焼いたクッキーで、復活祭の時期に焼かれる)と「*babka wielkanocna* 復活祭バプカ」(先端を切られた円錐形のケーキで、真中が空洞になっている。表面には砂糖やチョコレートなどのソースが掛けられており、干し果物やナッツ類が散らされていることもある)などがある。

家族との朝食では、全員がテーブルに集まり、一家の主がテーブル上の蠟燭を灯し、掲げ、「ルカによる福音書」の一節(イエスの復活の場面)が朗読される。続いて、一家の主は家族全員と家屋の全体に、聖水(事前に教会からもらっておく)を振り掛けてまわる。その後で、聖土曜日に聖別してもらった「*święconka*」の卵を各自が一切れずつ取り、互いの卵を食べ合いながら、相手のために願い事をする。そしてようやくテーブルに着き、朝食が始まる。

朝食が終わると、「*szukanie zajączka* ウサギ探し」が始まる。家族総出の遊びで、家の中や庭のどこかに隠されたプレゼントやお菓子を探し当てる。探す者以外は、歌や諺や言い回しや駄洒落を言いながら、どこにあるかを仄めかす。ウサギは罪人、新たに洗礼を受けた者、子沢山(子孫繁栄)の象徴として、イースター・エッグやクリスマス・ツリーと同じく、ドイツからポーランドへ入ってきた。

復活祭の午後には、「*Emaus* エマオ」という伝統もある。エマオに向かっていた二人の弟子が復活したイエスに出会うという福音書(「ルカによる福音書」)のエピソードから採られたもので、復活祭の日の午後の散歩を言う。ももとは巡礼的性格を持った散歩で、行き先(教会や礼拝堂)をエマオに見立てたものだが、

現在では、特に目的のない普通の散歩の他に、近い人々や病人を訪問することもある。そして翌日、復活祭月曜日は「lany poniedziałek 水かけ月曜日」とも呼ばれ、「śmigus-dymigus シミグス・ディングス」が行なわれる。もともとキリスト教以前のスラヴ民族の風習だったものが、後にキリスト教の復活祭月曜日と結び付いたのである。「シミグス」は、病や穢れから身を清めるために、柳や椰子の枝で足を叩いて互いに水を掛け合う春の習慣だった。この「病や穢れ」が後に

「罪」に代わった。「ディングス」は、イースター・エッグを差し出す代わりに水かけを勘弁してもらった習慣である。2つの習慣は15世紀頃に結びついたらしい。また、ポーランドの一部の農村では、復活祭の日の出とともに農夫が自分の畑に聖水を振り掛けてまわる風習があった。この場合、水は多産と生命の象徴である。この風習は、現在でも南部ポーランドに残っている。なお、キリスト教では、水は「罪」を洗い、新しい命を与える洗礼と結びついている。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)

第59回例会報告



企画してよかった!

2012年3月31日、ポ文協の第59回例会「樺太のポーランド人の軌跡—彼らはどこからきて、如何に行き、どこへ帰ったのか」が、かでの2・7、510会議室で開催されました。当日は、春嵐が吹き荒れる悪天候にもかかわらず、会員10名、一般17名の計27名の方々にご参加いただきました。

例会では、当協会の運営委員である、樺太豊原会の尾形芳秀さんが講師を務めてくださいました。北海道庁赤レンガ館にかかる一枚の写真から始まったお話は、樺太の地に生きたポーランド人たちの苛酷な運命、彼らと日本人との交流、アイヌ研究者ピウスツキのことなどを話題にし、樺太を舞台にした大きな歴史ドラマを見る思いでした。

会場にお越しいただいた皆様も、歴史の重みとそこで懸命に生きた人々の姿に思いをさせ、大きな感銘を受けたご様子でした。お話の後には、「ピウスツキは蠟管をどこから手に入れたのか」など聴衆から矢継ぎ早に興味深い質問が出ました。講師の尾形さんは、ご自身の体験から関心を持たれたテーマに関し、幅広く資料渉猟し、またサハリン、ベルリンなど海外にも足を運び調査され、実証的でありながらも、「血の通った」お話をしてくださいました。書物の狭い世界に閉じこもりがちな大学教員である私は、襟を正されるような思いをすると同時に、企画して本当に良かったという思いでいっぱいになりました。(佐光)

～講演会～

樺太のポーランド人の軌跡

—彼らはどこから来て、如何に生き、どこへ帰ったのか—

- ◆ 日時：2012年3月31日(土) 14:00～16:00
- ◆ 場所：かでの2・7 510会議室
(中央区北2西7)
- ◆ 主催：北海道ポーランド文化協会

講演者の

おがた よしひで
尾形 芳秀さん



心を驚づかみにされた講演会

尾形さんは1937年、樺太の豊原にお生まれになり、樺太の残留や亡命ポーランド人とともに旧市街で育ち、遊び、同じ学校で学んだという。樺太の敗戦前後の状況を知る人を探し続け、多くの偶然に導かれ重要な証言を得る。また、数奇なご経験を貴重な映像を通して聴衆に提供していただき、自ら樺太を語り継ぐ方だったのだ。渾身の講演会にはひたすら感謝し、そのリアルさに驚くばかりだった。

樺太は不思議な島だった。北方少数民族が住む自然豊かな島、間宮林蔵が調査に行き半島ではなく島であることを証明した島。日露混在時代を経て、ロシア領になった時代。帝政ロシアによる流刑囚の島の時代。日露戦争後は、日本軍の全域占領の島。そして、現在は国内で発行されている地図なら南樺太は日本とも、ロシアとも違う色に塗られている島だ。

さらに驚いたのは、参加者の関心の高さだった。尾形さんのお話真剣な表情で耳を傾ける中には、釧路・旭川近郊からもきてくださった方。その場で入会してくださった方も。今後の協会の企画力に一石を投じてくださった貴重な講演会になった。(氏間)



駐日ポーランド共和国大使館 + シアターX

能形式による戯曲（詩劇） 2012年3月5日（月）18:00～ シアターX（カイ）

新作能「鎮魂」^{ちんこん} ふくしま および ホロコースト—犠牲者追悼の夕べ プレリユード—



ちんこん
新作能「鎮魂」
朗読会を鑑賞して

霜田千代磨

去る3月5日午後6時より、東京の両国に在る「劇場シアターX」に於いて、駐日ポーランド共和国大使館の主催による「ふくしま および ホロコースト—犠牲者追悼の夕べ」がおこなわれた。当日はヤドヴィガ・ロドヴィッチ-チェホフスカ=写真右上=の新作能「鎮魂」の台本の朗読会であった。

第一作品は国立能楽堂で上演された「調律師-シヨパンの能」(POLE 第69号10ページ掲載)であった。今回は、2013年上演のためのプレリユードとして「鎮魂」の朗読だけであったが、日本語(関口時正訳)、ポーランド語(原作)、英語の順序で少しずつ進行した。東日本大震災で犠牲になった福島の少年の霊とポーランドのアウシュビッツ収容所で殺されたポーランドの少年の霊が前シテ、後シテとなっている。

戯曲の朗読というものは、観客としては、理解するのはなかなか困難さを伴うものである。ト書から役名(登場人物名)をいちいち繰り返される事は、本筋の理解を助けるどころか、筋の理解を追うだけで疲れてしまう。それが、3カ国の繰り返しとなると尚さらの事であった。し

かし、面白い発見もあった。言語の持つ音楽的ひびきの違いには、ことさらに興味深いものがあった。

英語は川の上層の流れを聞くが如く、ポーランド語は中間の流れを聞くが如く、日本語の「遅速強弱」は川底の流れを聞くが如きおもむきがあった。当たり前のことながら、能の戯曲は能舞台に於いて、地謡(じうたい)や笛、大鼓(おおかわ)、小鼓(こづつみ)の鳴物が入って、はじめて完結する事を自分自身確認した次第である。日本の古典演劇としての「能形式」のすごさも再確認した。

日本語(古語)のかたいセリフ廻しと単調な流れを、随時藤田六郎兵衛師の笛(能管)の調べが助けていた事も大きかった。音楽は世界共通である。

終演後、ロビーで会ったロジャー・パルバース(東京工業大学世界文明センター長)とも「良かった、よかった」と成功を喜び合った。それは日本人でも難解な能戯曲を二作も書き上げた、イガ・ロドビッチ女史に対する讃嘆の気持ちからであった。2013年度の能楽堂の開演が今から待ち遠しい気持ちで劇場を後にした。副会長(しもだ・ちよまる)

＜第62回例会＞ポーランド文学朗読会

“ポエジアの夕べ”で「鎮魂」を朗読予定。

6月16日(土)午後2時から

クラーク会館 3F

お問い合わせ：FAX 0126-56-2969 (霜田)

《 緊急予告！ 》

シヨパンへの
芸術的オマージュ

2012 5月29日(火)

19:30～

シアターX(カイ)

チケット千円

新作能「調律師」による詩の朗読とワルシャワ公演のドキュメンタリー映像の調べ。 ピアノ：霜田陽子

北海道新聞(夕刊)2012.4.2から転載

時評
文芸

沼野充義

大震災からはや一年。文芸関係でもこの一年を振り返った特集企画が目立つ。《中略》新作能「鎮魂」の朗読形式による上演(関口時正訳)を東京シアターX(カイ)で観たときも、そんな思いを深くした。作者は駐日ポーランド大使で、能の研究者でもあるヤドヴィガ・ロドヴィッチ・エホフスカ。これは息子を大津波にさらわれた福島の日本人と、ホロコーストの犠牲者の霊魂がアウシュビッツで出会うという設定の驚くべき作品である。

今月の文芸誌を見ても、大震災そのものを扱った作品よりも、それ以前の過去から現在を照らし出すといった趣の作品が目についた。(以下略)

(ぬまの・みつよし) 東大文学部教授

今後の活動予定

◆<第 60 回例会> ポーランド映画セレクションⅡ

5月5-6日(土日) 10:30~

北大学術交流会館講堂

全7作品&ワークショップ

◆<第 61 回例会> 創立 25 周年ピアノコンサート

5月12日(土) 13:30~

札幌コンサートホール Kitara 小ホール

◆<第 62 回例会> ポーランド文学朗読会

6月16日(土) 14:00~ 只今、出演者募集中!

北大国際文化交流活動室(クラーク会館 3F)



ポーランド 広報文化センターが 東京に開設

昨年11月、ラドスワフ・シコルスキ・ポーランド共和国外務大臣の決定により、東京の駐日ポ

ーランド共和国大使館内にポーランド広報文化センターが開設された。このセンターはポーランド共和国外務省直属の機関であり、広報外交・文化外交等におけるポーランド共和国大使館の活動支援を目的としている。

日本は、ポーランドの重要な政治、経済、文化的パートナーであり、センターの開設は世界で22番目、東アジアでは初めて。背景には、2009年の日本・ポーランド国交樹立90周年、2010年のショパン・イヤー、2011年のポーランドの欧州連合理事会議長国就任を記念し、様々な事業が展開されたことからポーランドの文化・学術が日本において広く紹介、普及されるようになったことが関係している。

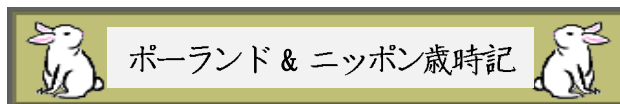
<http://instytut-polski.org/>



新入会員のご紹介

竹田 真司さん(4月)が入会されました。
どうぞ宜しくお願い致します。(副事務局長・栗原から)

<連載俳句>



冬風や髭のニツカの香はいかに
(季語「冬風」)

旧市街木玉子絵卵イースター
(季語「イースター」)

北窓を開ければそこは北の海
(季語「北窓開く」)

千代麿

<岩見沢市在住。霜田千代麿さん>

1992年より作句する。伝統俳句協会会員。現代俳句協会会員。北海道俳句協会選者。「夏至」同人。

復活の街に白雪聖骸布
しらゆき

陽石

復活祭は冬から春への過渡期でもあります。もし永遠の命という視点があれば、無季語の俳句を詠んでもいい理由になるでしょうか?

Po zmartwychstaniu
Ściele się całun biały
Śnieg na ulicy

Yōseki

<ポズナン市在住。ポーランド人女性 陽石さん>

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

POLE

第74号 ポーレ編集委員会

氏間多伊子 / 柏木由美子 / 栗原朋友子
佐光伸一 / ラファウ・ジェプカ

北海道ポーランド文化協会会誌

POLE 第 74 号 (2012 年 4 月)

目 次

〈第 60 回例会〉ポーランド映画セレクションⅡ [案内] / 〈第 61 回例会〉創立 25 周年記念 コンサート [案内]	1
ポーランド映画セレクションⅡ上映スケジュール、(D プロ)「世界の夜明けから夕暮れま で」、佐光伸一「監督+撮影コラボによる最高の作品ができるまで」、(A プロ)「木漏れ日 の家で」、(B プロ)「僕がいない場所」	2
高橋健一郎「創立 25 周年記念コンサートに向けて」	6
津田晃岐〈ポーランドだより 6〉「変わりゆくポーランドの復活祭」	7
〈第 59 回例会報告〉講演会：尾形芳秀「樺太のポーランド人の軌跡—彼らはどこから来て、 如何に生き、どこへ帰ったのか」 [2012.3.31]、佐光伸一「企画してよかった」、氏間多伊子 「心を驚つかみにされた講演会」	10
霜田千代磨「新作能『鎮魂 (ちんこん)』朗読会 [2012.3.5] を鑑賞して」	11
霜田千代磨・陽石 [津田モニカ] 〈ポーランド&ニッポン歳時記〉 / [事務局より] 今後の活動 予定：ポーランド映画セレクションⅡ、創立 25 周年ピアノコンサート、ポーランド文学朗 読会、ポーランド広報文化センターが東京に開設	12